

---

## 乳がん検診のご案内

---

検診の目的は、その病気による死亡を減らすことにあります。郡山市では乳がんによる死亡の減少をめざして、1987年より視触診による乳がん検診をはじめました。対象は30歳以上の郡山在住の女性で、国民健康保険加入者および国民年金第3号被保険者（給与所得者の専業主婦）です。

しかし、1998年3月にがん検診の有効性評価に関する報告書が提出され、視触診による検診では乳がんの死亡率を減らす効果が不十分であるとされました。

そして2000年3月31日、厚生省は「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」の改正（老健第65号）により、各自治体に対し50歳以上を対象としたマンモグラフィ併用隔年検診を勧奨しました。これを受けて郡山市では、2001年度よりマンモグラフィを併用した乳がん検診を開始しました。マンモグラフィ併用検診の対象年齢は40歳以上で、1年おきの隔年検診としました。30歳代の方には従来どうりの視触診による検診を行っております。

### マンモグラフィ併用検診の結果

2001年度～2003年度までの3年間の受診者総数は15,246名でした。全員が視触診を受け、25例（0.16%）の乳がんが発見されました。

視触診上異常のない方でマンモグラフィ撮影を受けた方が13,310名でしたが、なんと視触診で発見された乳がんと同数の25例（0.18%）がマンモグラフィにより発見されました。視触診では触れることのできない早期のものがほとんどです。このように、マンモグラフィ併用検診は乳がんの早期発見にとっても役立ちます。是非、多くの方に受けていただきたいと思います。

### 自己検診をしましょう！

胃がんや大腸がんとは異なり、乳がんは自分の手で触れることのできるがんです。私は、患者さんが偶然に気づいた乳がんの大きさを調べたことがあります。直径の平均は3.2cmでした。つぎに、乳がんの検診を目的として自分でお乳を触り、そのときに気づいた乳がんの大きさを調べました。直径の平均は2cmでした。これだけでも自己検診は早期発見に役立つことがわかつていますが、自己検診が早期発見に有効であるという論文はたくさんあります。月に1回、自己検診をしましょう。

---

## 乳がんについて

---

日本の乳癌は年々増え、女性の癌としては最も多いがんとなりました。最近の1年間に発症する乳がんは約35,000人で、10年後の2015年には約48,000人に増加するといわれています。つまり、20人に1人の女性が生涯のどこかで乳がんにかかる計算になります。

一方、欧米諸国でも乳がんはふえており、現在8人に1人が生涯のどこかで乳がんにかかるといわれています。しかし欧米では1990年頃より乳がんによる死亡数は減ってきました。その最大の理由としてマンモグラフィ（乳房のレントゲン検査）による乳がん検診の普及があげられています。

郡山市では2001年度よりマンモグラフィによる乳がん検診を開始しました。「自分は大丈夫」ではなく自分もいつか乳がんになると考え、早期発見のため検診を受けるようにしましょう。

がん細胞は、からだ全体の調和を無視して、自分勝手にふえます。ある程度以上にふえると血管やリンパ管にはいりこんで他の臓器に転移することもあり、最終的には体を死に追いやるこわい病気です。でも、治療法もどんどん進歩していますし、また胃がん、乳がん、肺がん、子宮がんなど、がんが発生する臓器によって性格がかなり異なります。早期の乳がんは90%以上の方が治り、現在は乳房を残す治療法が一般化してきました。以下に乳がんの診断と治療法について簡単に記載しましたが、乳がんの特徴を理解していただき、早期発見・早期治療に役立てていただければ幸いです。

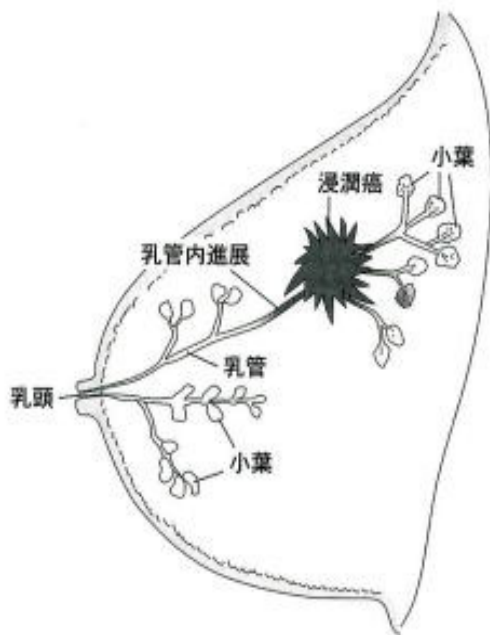
### 乳がんとは

乳房は、母乳をつくる乳腺、赤ちゃんに母乳を与える乳頭、そして脂肪と皮膚からできています。乳腺は母乳をつくる小葉と、つくられた母乳を乳頭まで運ぶ乳管から成りますが、日本人の乳がんの多くは乳管から発生します。

### 【原因】

はっきりはしていませんが、エストロゲンという女性ホルモンの影響が大きいようです。エストロゲンは初潮から閉経までのあいだ卵巣から分泌されますが、食生活や環境の変化により初潮の年齢は若くなり、また閉経の年齢は高齢化しています。つまり乳腺がエストロゲンの作用を受ける期間が長くなってきています。このことが、乳がんが増加している一つの原因と考えられています。また、体の脂肪からもエストロゲンはつくられるので、肥満の人は乳がんになりやすいといわれています。

乳がんの原因



## 乳房の断面図

黒住昌史：病理学的検査 インフォームドコンセントのための図解シリーズ，  
医薬ジャーナル社 2000より引用

### 【他のがんと比較】

乳がんは，胃がんや肺がんにくらべて再発が少なく治りやすいがんといわれています。でも，注意も必要です。「がんは手術して5年たてば大丈夫」と言われていますが，乳がんの場合は5年以上経過してからの再発もときにみられます。したがって，早期の乳がん以外は，手術の後10年間は定期的に全身の検査をしたほうが良いでしょう。幸いなことに，乳がんは他のがんにくらべホルモン剤や抗がん剤がよく効きます。不幸にして再発した場合でも，これらの治療の効果により，体の中のがん細胞の発育をおさえ，普通の家庭生活をしている方が多くいらっしゃいます。

### 乳がんの診断

視触診，マンモグラフィ（レントゲン写真），超音波検査，細胞診（腫瘍に針を刺して細胞を取り，がん細胞の有無を調べる）により診断をします。

ほとんどの場合はこの4種類の検査で診断がつきますが，それでも難しい場合は，手術により腫瘍の一部または全部を取って顕微鏡で調べる場合があります。

また，乳がんが診断がついた場合，転移がおきやすい臓器（骨：シンチグラフィー，肺：胸部レントゲン写真またはCT，肝臓：超音波またはCT）の検査をして転移の有無を調べます。

撮影のとき、乳房を圧迫して薄くする必要があります。乳腺が発達していると痛みを感じる場合がありますが、ちょっと我慢をしてください。



<マンモグラフィ撮影装置>



<撮影風景>

---

## 乳がんの治療

---

まず手術により腫瘍とリンパ節を切除します。そして、切除した腫瘍とリンパ節の検査から内分泌治療の効果が期待できるかどうかと、病気の進行度を決めます。病気が進んでいる場合は、点滴による作用の強い抗がん剤を使うこともあります。

### a) 手術

#### 乳房温存手術

腫瘍をその周辺の脂肪や乳腺を含めて切除します。

乳房の多くは残りますが、腫瘍が大きい場合や乳房が小さい場合は、残した乳房の変形をきたします。

乳房温存手術は、ある一定の条件を満たす患者さんにおこなった場合、乳房全摘手術と同様の治療効果が得られることがわかったため、最近普及している手術法の一つです。原則として以下の条件を満たす場合が適応とされています。

- ①腫瘍が小さいこと（直径3cm以下）。
- ②乳房レントゲン検査でがん細胞の広がりが小さいと予想されること。
- ③残した乳房に放射線を照射できること。
- ④患者さんが乳房温存療法を希望すること。

長所	①美容的に優れており、体動による衣服の着くずれなどが少ない。 ②手術後に腕のむくむ確率が若干少ない。 ③乳房が残ることによる精神的な安心感。
短所	①原則として手術後に残った乳房に放射線照射をおこなうため、治療期間が約6週間ほど長くなる（ただし、必ずしも入院の必要はありません）。 ②残った乳房は手術前より量が少なくなるため、多少変形し、左右の対称性が保てないことがある。 ③残った乳房にがんが発生する可能性がある（ただしその時点で切除すれば治療成績ははじめから全部取った場合と変わりはありません）。

**乳房全摘手術** 乳頭を含む皮膚と全乳腺及び周辺の脂肪を切除します。  
肋骨と乳房のあいだにある大胸筋，小胸筋は切除しません。

長所	①手術後に放射線照射の必要がなく，治療期間が短い。 ②残った乳房にがんが発生することはない（乳房が残っていないから）
短所	①乳頭を含めた胸のふくらみが無いために，美容的な面で不満を感じる人が多い。 （ただし現在はパットなどの装具も良いものが工夫されています）。 ②人によっては乳房の喪失感がとても大きく，精神的に不安定になる場合がある。

**リンパ節切除** わきの下のリンパ節（腋窩リンパ節）を切除します。

一般的な手術の方法としては，乳房部分切除と腋窩リンパ節切除か，乳房切除と腋窩リンパ節切除のいずれかになります。最近では，腋窩リンパ節を取らない方法が研究されています。

#### **b) 切除標本（腫瘍とリンパ節）の検査**

切除した腫瘍を材料にして，ホルモン剤が効く種類の乳がんか否かを検査します。また，切除したリンパ節にがん細胞の転移があるかないかを顕微鏡で調べます。この検査結果は手術してから 15 日前後にわかります。

乳がんの進行度はしこりの大きさと，がん細胞の転移したリンパ節の数で決めますが，再発と一番関係があるのは，転移したリンパ節の数といわれています。つまり，リンパ節に転移がなければ再発の可能性は低く，転移リンパ節の数が増えるに従って，再発の可能性が高くなります。

#### **c) 内分泌治療**

体中のエストロゲンという女性ホルモンを少なくするのが目的です。薬剤による方法と，手術により卵巣を切除する方法があります。

#### **d) 抗がん剤による治療**

比較的副作用の少ない，飲み薬の抗がん剤もあります。また，白血球が少なくなったり食欲不振や脱毛などの副作用のみられる，作用の強い抗がん剤（注射薬）までいろいろあります。再発の可能性が高い場合は，副作用はあっても強い薬による治療を受けたほうが良いでしょう。